



## 明治時代のガラス食器について



明治18年(1885)岩城硝子製造所はそれまで製造困難であった赤色ガラスの製造に成功し、これを用いて船舶信号用のホヤを完成しました。これを機に海運会社との関係が深まり、それまでの外国製に代わって岩城硝子製造所製のガラス食器が外国航路船に採用されていきます。また、明治22年(1889)には宮内庁から御料ガラス食器製造社として指定も受けました。

ところで我が国のガラス製造を初めて行った工部省品川硝子製作所がガラス食器の製造に力を入れたことから、明治10年代にはガラスの食器は全国に広くゆきわたっていたようです。また、ガラス製品の中では、食器類の製造技術が最も早く進歩したとも言われています。

当時のガラス食器の製造方法には吹製と押型製があり、吹製にはジャッパン吹(和吹)と舶来吹(宙吹)の2種がありましたが、明治の初期までは全てジャッパン吹であったと言わ



石井研堂「硝子の巻」宙吹き法

れています。このジャッパン吹は、共竿でガラス種を巻きとり、口中の息をもって素地を吹き上げ、わずかの手加減で成型する方法でした。明治9年(1876)には西洋風の鉄竿が用いられるようになり、また、成型加工用の道具である、鉄箸、ハサミ、コテ

なども鉄製のものが用いられ、これらによる製造方法は舶来吹と呼ばれていました。

ガラス器物の成型に使用する型は、粘土・砥石などから木型になり、その後は英国から鋳鉄製の金型が輸入されるようになり広くゆきわたりました。押型法(圧搾型成型法)は肉厚の扁平な皿、鉢などの器物の成型に適する方法で、この技術も品川硝子製作所によって輸入され、ガラス食器の製造技術は一段と促進されていきました。



ガラスに模様を切り込む



圧搾型成型法

